

スポット展示

疫病平癒の靈験仏

—杉原薬師寺の薬師如来坐像と弘法大師伝承—

令和2年(2020) 5月16日(土)～6月21日(日)

会場:和歌山県立博物館 2階学習室スポット展示コーナー

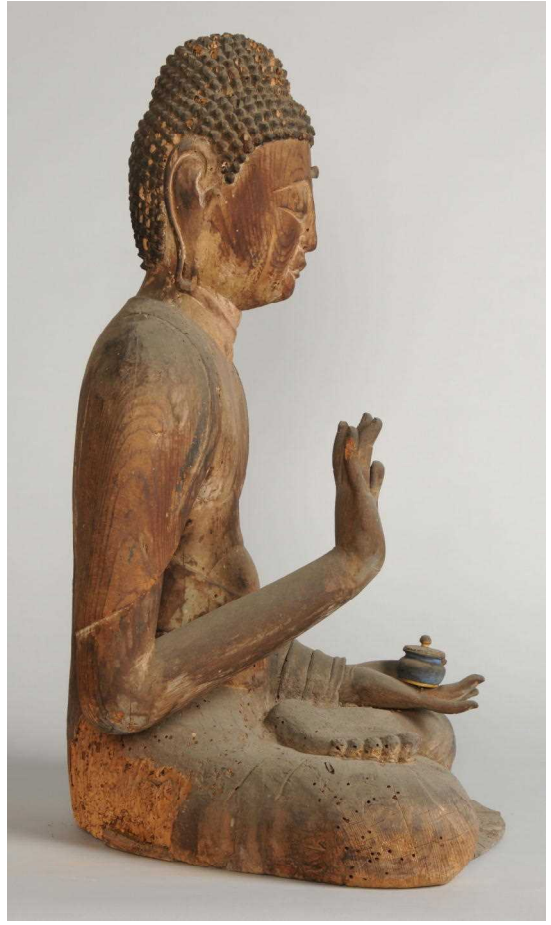
現在、新型コロナウイルス感染症が世界に広がり、市民生活にも大きく影響を及ぼす未曾有の事態となっています。歴史的には人間社会は常に疫病の脅威にさらされ続けており、現代の感染症対策では医療とともに高度な衛生観念の普及が重要な役割を果たしている、清潔にして身を守る私たち自身の行動が、感染症封じ込めの一翼を担っています。

一方、前近代においては、人々は流行病は疫神や悪鬼のしわざと考え、それらを祓い清めたり、祠に祀って鎮めたほか、神仏にすがって悪疫退散を祈願しました。八坂神社(祇園社)の祭神である牛頭天王や各地で信仰を集める薬師如来がその代表です。

紀の川市杉原の薬師寺にまつられる本尊の薬師如来坐像は、像高55.7cm、檜の一木から頭体の根幹部分を彫り表した一木造で、内割りはありません。円満な頭部の輪郭や抑揚の穏やかな体型、緊張を解いて座る姿勢など平安時代後期の作風を示し、威厳あるその表情にはやや古風な表現も見られ、造像時期は11世紀まで遡るとみられます。

薬師寺に伝わる貞享5年(1688)に記された「紀州那賀郡杉原村竜門山薬師寺縁起」(『粉河町史』所収)には、天長3年(826)の秋、国内に疫病が流行した際、弘法大師が像高一尺七寸の薬師如来像を造って7日間祈願したところ、病人は癒え、死者も蘇る奇瑞が起こった。その靈験を聞いて人々が多数お参りにやってきたので、この仏像を本尊として薬師寺を建てた、と語られます。もちろん薬師如来坐像の造像時期は弘法大師(空海)の在世時までは遡りませんが、繰り返し流行する疫病による病や死への恐怖から人々を救うため、高僧に仮託して、本尊の靈験を語るこの縁起が形成されたのでしょう。

疫病平癒の靈験仏の紹介を通じて、疫病と向き合い続けてきた私たちの苦難と克服の歴史に思いを馳せるとともに、今般の感染症流行の早期収束を心から願いたいと思います。



藥師如来坐像 藥師寺(紀の川市杉原)蔵 像高55.7cm 平安時代(11世紀)

紀州那賀郡杉原村竜門山藥師寺緣起

(杉原 藥師寺所蔵)

夫当寺者、仁王五十三代、淳和天皇御宇弘法大師建立藥師如来之淨刹也。抑考当寺開闢之由来、昔 嵯峨天皇弘仁七年大師開高野後、年来見所之創伽藍。然当寺者、天長三年之秋疫厲侵民、死者不知数焉。於是諸民不堪憂惱、以此事、白大師、大師愍之、造一尺七寸之藥師如来、修法一七日、嬰病者悉愈、死亡者皆蘇。国家聞之、運步者如霞集、昼夜相繞無絕時。無災不擁無願不滿、功德之錢財、其集如山丘。於是大師為末世利益造日光・月光・十二神將・多聞・持国之像、營七間四面堂、又諸堂坊舍皆成。而延供養誓未來之值遇。爾後衆僧共住香花祝願日新。恒例法会人成雲、最轉禍為福之道場者也。然仏法依人弘世間、又人者依仏神之守護增運命添福智。是世間目前之道理也。然世以時移、人以歲易、故信心夜薄時去邪見、日々增長災生国。故伽藍衰頽玉担雖落無拳人、或国治信厚時者法興人榮如是。興廢及数度故、仏事法事之旧容以次第消損。中世建武之間、国朝分南北兵乱之災久居。当此時、当寺罹兵火之余災、伽藍一時回祿、忽顯兵塘之跡。雖然、諸兵卒畏仏体移置辺処之堂。是以遁兵火而止原野中。其後永享年中、当村有杉原氏之武士、信心亦有力也。悲此没蹟、建小堂、安置本尊、營五部大乘經、每年之首転堂中攘年中災祈民家之福。夫藥師如来之本願者、於現当、左有頼乎深矣。如經中說、其說其福不可勝計。有心衆生誰不信仰。是以來世衆生傾信心、帰依此尊。以縁日可運步。皆受現当利益、勿生疑。縁記趣、大概如件。

貞享五辰孟春上浣

山田氏吉近欽書之。